武田泰淳と「文化集團」（その二）

長田真紀

武田泰淳に、「狐塚牛太郎」という筆名があったことは、知る人ぞ知る伝記的事項である。

しかし、これまでその「狐塚牛太郎」の筆名で書かれた文章は、ひとつも存在が判明しなかった。

このたび、文学系の雑誌のひとつである、「文化集團」（昭和八年六月創刊――昭和十年二月終刊、通刊二十一号）に、武田泰淳が「狐塚牛太郎」の筆名で執筆していることを確認できた。

中国現代文学に関する研究および評論的文章が以下の二点。

・「中國左翼文壇の現狀」（「文化集團」第二巻第七號、昭和九年七月一日発行）

・「中國文學情報」（「文化集團」第二巻第十號、昭和九年十月一日発行）

翻訳が次ぎの一点である。

・「蜜蜂（張天翼）」（「文化集團」第二巻第八號、昭和九年八月一日発行）

これら三点は、『増補　武田泰淳全集』未収録であり、古林尚氏作製の「武田泰淳年譜」にもその存在について記載はされてない。

本稿では、本誌第二十二号の拙稿「武田泰淳と「文化集團」（その一）」に引き続き、「中國文學情報」（「文化集團」第二巻第十號、昭和九年十月一日発行）の紹介をしたい。まずは、全文を掲げる。

なお、仮名遣い、旧漢字の表記等は原文のままとした。句読点の不備や誤植、散見する「……」等の伏せ字についてもあくまで原文にしたがい、敢えてそのままとした。

中國文學情報

狐塚牛太郎

(1) 中國の農民文學

日本でも農民を題材とした小説は、殊に最近、どし〳〵すぐれたものが發表されてゐるが、支那は農民文學においては日本より遙か先輩である。魯迅をはじめ矛盾・丁玲等のすぐれた作家は皆農民文學の分野を開いた人であつた。農民運動の波は高まつたりしづまつたりしたが現在においても、農民文學はのろ〳〵としかし明白に進歩しつつあるのである。

支那の農村が日本の農村より何倍も悲惨なものだと云ふことは、洪水とか旱害とかいふ自然の暴威の下で餓死・溺死・病死する人數でもわかるが、それよりも各國の壓迫から來る經濟的

缺點のためにどれ程、暗い悲しむべき狀態にあるかは恐るべきものである。血なまぐさい原始的の刑罰(ママ)におびやかされつつある支那の作家達がこの悲慘な農村を題材とした結果、支那の農民文學にはいろ〳〵の特質があらはれたのである。

作家達がかつて農村に直面して感受し表現したことは何か？それは救ふべからざる農村の無智なおしひしがれた人々に對する同情と作家のインテリ的な虚無感である。それは殆どすべての作家達がもつてゐた傾向であつた。そして彼等は魯迅が阿Qといふ無智無力な……まきこまれて刑死する農民や原始的な信仰を求めて死んで行く祥林嫂といふ寡婦について書いたやうに自然の荒涼さと人間の破滅をかきつづけたのである。

併し此のわびしい客觀的描寫のみをつづけてゐるには、……が強大にすぎたのだ。

彼等はやがて農村が都會とおなじ社會の發展法則に從つて……、かつこの悲慘そのもののやうなボロ着物の農民たちが恐るべき力を發揮するのを目擊したのである。彼等の多くのものは自分自身も土まみれの民衆の中へ入つて行き、遙かなる共同の目的のために農村にあつて活動しはじめたのであつた。すぐれた女流作家丁玲は夫である胡也蘋を……て以來敢然として此の方向に彼女の生活をすすめて行つた一人である。彼女は享樂と絶望の『暗黑の中に』（註一）於てすでに（阿毛姑娘）といふ農村の可憐な女性を主題にせる短篇を書いてゐる。阿毛は田園の自然の中から、夢の樣に樂しくて美しい都會生活をあこがれてゐた。都會から來た青年男女は自分達に比べて何と綺麗なんだらう。だがその樂しげな都會の女性もある朝、露の消えるやうに死んで行つたではないか。空想、疲勞病氣、自己厭惡……。彼女はマッチを飲みこんで自殺してしまふのである。

（註一）彼女がまだ享樂主義におち入つてゐた時代の短篇集名前。

だが彼女はすでに自覺し進歩的團體の一員としてすぐれた農村文學をどし〳〵と書き出したのであつた。そのいづれもが後の作家達のとらへるべき重要テーマ、作風、目的を暗示する指導的なものであつた。主題の積極性といふことで恐しく怠慢であつた仲間を追ひ越して女とは思はれぬ成果を殘して行つたのである。洪水に際しての群集の騷動を書いた《水》封建主義的迷夢の中から次第にひらけ行く農村に對して女地主一家を中心として實におちついた觀察をなしとげてゐる大作《母親》等は丁玲の前には何人もとりあげ得なかつた題材であり、遺憾ながら彼女の後を引きついで發展させる作家の出でない(ママ)眞の方向であつた。彼女が前に紹介した《阿毛姑娘》で示した都會と農村の關係を彼女は《奔》といふ小說で全く素朴な情緒をはなれ意識的にとりあげたのである。

農民の都會への流入。それは大きな一般的上昇期の現象である。之なくしては工場は初期にはその勞働力を滿すことができなかつたのであるから。だが丁玲は世界的恐慌下の作家であつた。上海へとあてなしに「奔」つて來た土百姓はその日から仕事が無いのだ、あてにしてきた知人の勞働者は想像とはちがつて青黃色く營養不良でおまけに工場ではストライキである。彼等は止むなく、しかし新しい意識を持つて歸つて行くより外しかたないのである。《奔》は明確な意識を以てかかれたごく短い作品であり明白に大衆に讀ませるためにわかり易く書かれたものであるが、其處には、意識を先走らせ主題をもり込まうと

するために起るあの日本の作家達の經驗した危機が含れてゐた。

農民文學に於いて以上のやうな成果をあげえた丁玲は作品を書く上に確固たる次のやうな基礎條件を持つてゐたのである。

一、空想的に一人の英雄的勞働者、又は農民を書いてはならぬ。それは社會的事實に合致しないからである、ママ

一、大衆を主人公にしなければならぬ。

一、自分を大衆から脱離させてはいけない。自分を作家だと思つてはいけない。自分は大衆の一人であり、大衆にかはつて話してゐることを記憶せよ ママ

一、議論を出してきてはいけない。自分の思想、自分の話を人物の行動によつて具體的に表現しなければならぬ ママ

一、自然描寫を活動させ全篇の情緒と一致せしむる必要がある。

（作家聯盟機關紙であつた「北斗」に發表された《創作に對する二三の具體的意見》より。

私が丁玲を代表として少しばかり過去の農民文學の水準を示したのは現在つまり其の後の中國の農民作家の活動を批判するのに都合よいと思つたからである。

現在の中國の農民文學は丁玲や魏金枝や矛盾の美しい飛沫は反動の風に吹き拂はれて（一時的にしろ）消え去つてしまひ後にはただ何處へ行くともしれぬ底知れぬ無表情な作品の流れが殘つたと言つた狀態である。農民組合に關した作品が絶無な程、題材は明確性を失ひ、所謂ありのままの描寫、眞面目一方のスケッチにおち入り、力ある長篇は影も見せ得なくなつた。一部の支那文學研究者は魯迅以後、中國には評價すべき作品がないではないかと絶望し出したのである。

併し私は、さして目ざましい浪も揚げえぬこの農民文學ののろい流れの中に烈々として絶えざる目的への前進を見逃すことは出來ないと思ふのだ。彼等作家達は四億の人間を包藏する中國内の各地から漂浪し驅り立てられて自分に親しい鄉土の自然と人生について書きはじめた。蹇先艾は苗族がいまなほ血のまんぢうを求めて原始的な生活を營んでゐる貴州について書き、何穀天は西康の黄塵の中から現はれ、沈從文は湖南の美しく流れてやまない水の上の生活をかきつづけ、艾蕪は馬盗人が笑ひながら生活できるビルマの山の中のことまで物語つた。方言が統一もされず、教育が普及されない中國にあつては、農民文學の地方性が非常に重大なものであらう。地方性のない一般化された農民文學などといふものは、土を愛し農民を知つてゐるものには書けはしないものである、そして是等の作家達の作品は小説といふには不完全な幼稚なものであつても、飾らない土臭い表現の中に新しい出發の芽生えを見取ることができる。

殊に誰を農民作家などと云ふ必要はない。支那のどの作家達の眼の中にもいつも荒廢した田園や故鄉の母親や地方へ去つた友人等の影がうつつてゐる ママ

女流劇作家、白薇は子供時代は青山にかこまれた鄉村の中で嚴格な母親から監督されながら花模樣のぬひとりを日がな一日やらされてゐたのであつた。すぐれた女作家、吳似鴻の「流浪少女の日記」におさめられた短篇がしみだしてくる鄉土に對する女性のひそめられた熱情は人を打つものがある。《毛姑娘》とか《羅娜》とかいふ田舍の少女の日に燒けた文明を知らない肉體のなかに生れた美しい感情はまれに見るものであらうと思

ふのだ。徐轉蓬はごくありふれた農村の小話をかく。だがその中に素朴な感情があふれてゐる。彼の作品には近頃なまけてゐる既成作家、張天翼のあくどい農村物よりも胸をうつものがある。

此等の多數の作家が數册の文學雜誌に毎號必ず數篇の農民文學をのせるのであるからその内容の多種多様な事は云ふまでもない。

とりあげる人物は一般的にはみぢめな貧農、無智な農婦、それから收税吏地主、災害救濟委員、教師、米屋、匪賊、商人等である。

納屋を荒し、隣同志を喧嘩させるおそるべき鼠の群、農民を熱中させ盲目にする鬪牛、雪地で食料代りに首を絞められる飼犬、農村では動物までが暗い。あらゆる感情が暗い。戀愛は殺人を生み、處女は……だ。その事件の一つ一つ。その人物の一人一人を中國の作家達は巧はないが書いて行く。

現在中國で最も注目され出した農民文學作家は清華大學出身の新進、吳組湘である、[ママ]彼が此の半年間に發表した三つの作品、《一千八百担》《天下太平》《樊家舖》がどれも從來の他作家に比較して力がこもり、現實をあばき出すことがすぐれており、小説として構成がすぐれてゐたからである。彼は無慈悲に殆ど無感情な態度で悲慘な事實を書いて行く作家てある。[ママ]だから彼の作品にでてくる農民は日々のこの曲げることのできない事實に追はれて人間的な感情がなくなつたやうに、ただ行動してゐるといふ人々である。《樊家舖》を例にとらう。

樊家舖といふのは匪賊におそはれやうとしてゐる小さな村である。村の住民も次第に匪賊化して行く。そして夫はつひに捕へられた。彼を救ふには金がいるのだ。妻は彼を助けたい爲に母の金をうばはうとする。爭の結果母は殺される。しかし土匪はすでに縣城を破り、夫はもはや牢を拔け出してしまつた！「おつ母さん」。妻は一聲叫んで倒れふした。

此等の投げ棄てられたやうな事實の描寫、それだけで農民文學は成功したといはれやうか？　それは不安を嘆くインテリのみを讀者とする場合には結構であらう。だが農民文學は田舍の百姓、都會の職工にもよませたいではないか。事實、農民達は娯樂を求め希望を持つて此の苦しい世の中を切り拔けやうと肥料のきかない畠地に立つて手をのばして待つてゐるのである。いくら小説の中に自分等の事がかかれても自分等がよんで樂しく、又は元氣がでてくるやうなものでなかつたら誰でもいやになるではないか。

中國の新しい作家達の危險はむしろここにあると思ふ。それは上手下手よりもつと根本的な事ではあるまいか。

此の事に關して參考になるかと思つて次に大衆語の問題をつけそへて置いた。

(2)　大衆語の討論

大衆語の問題は新聞の文學副刊などで盛に討論されるほど支那では重要視され、古文、つまり文語體が一部の學者、教育家によつてやかましく復興を叫ばれてゐる現狀ではさらに問題となる討論である。

儒教、佛教の復興が政府の新生活運動とともに提稱されてゐるのとは全く逆の意味で、進歩的な人々は此の大衆語問題に熱心なやうである。新生活運動が盛んなある省では男女が往來で

も車中でも一緒にゐてはいかんとおこられる有様なのに、此處では文學を大衆化するためにまじめに言語の改造、建設が討論されだしたのである。その意義の小さくない事がわかると思ふ。

私は多數の資料に眼をとほしたわけではないが、『文學』の八月號大衆語問題特輯にのってゐる陳望道の論文に大體よって説明することにした。

清朝政府が打倒され孫文等の新しい勢力が政府を造った時期に提稱され出した白話（現代語）は文言（文語體）を追いはらって直ちに全國に使用されるやうになったのであるが、現在の中國文學はもはや單なる白話では滿足できなくなった、白話文で解決されなかった問題は大衆語で解決しなければならない。

その討論の要略は次の三點に集注されてゐる。

(1) 大衆語の文語文並びに白話文に對する關係は如何？ 大衆語は文語文に對立するとともに又白話にも對立するものではないか？

(2) 大衆語の現用語に對する關係は如何？北京語を表準とするか？ 「現代中國普通話」を表準とするか？ 又は各地方の土話、方言を發展させるか？

(3) 大衆語の言語形式と意識內容の關係はどうか？ それは大衆の意識を代表するものか？ 又は進步的大衆の意識を代表するか？

要するに『大衆が話す事が出來、書くことが出來、聽きとることができ、讀む事が出來る』といふ事が大衆語の絕對的の條件である。作家達は此の條件に背くやうな文字言語は使ってはならない。又讀めるやうに書けるやうに教育が普及されなくてはならない。

さて此處に一見非常に困難な問題＝障害がこの大衆語の建設の途上に横はってゐるのだ。それは大衆はその質が高ければ（文化が豐富なら）量が少いし、又量が多ければ質は低くなるといふ事である。つまりこれでは、大衆みんなに讀ませたいし、又立派な思想內容も盛りたい大衆語をつくりだすことはむづかしからうといふのである。これは大衆語を嘲笑する人々のよりどころらしい。

ところが大衆とはそんな情ないものだらうか？ いや、大衆は常に生長し發展しつつあるのだ。大衆語文學は正にかかる「大衆」の量と質の矛盾克服を助成する任務があり、大衆は自身でこの克服を完成する。彼等は……に對しては團結……を何よりも自覺するではないか？ 彼等はまかれた砂のやうにバラ〳〵のものではない。

大衆語と文語文と通俗的白話文は三つの內容を異にする言語である。文語文は大衆に反し通俗的白話文は大衆に迎合したものであり、ただ大衆語のみが大衆自身のものである。

これはもとより一朝にしてなる事でなく、また外部的には文學者の自覺によってはじめて次第になされる事である。たが現在でも中國の都會の工場勞働者で『罷行』――ストライキと『示威』――デモといふ名詞を知らないものはない。分析、揚棄、研究、組織、建設はすでに一般化してゐる。

「新語林」創刊號の《「大衆語」の建設問題》にはさらに具體的に「大衆語」の建設は可能なりやの一節に於て次のやうにのべてゐるのは注目すべきものと思ふ。

大衆語の建設は困難だ。もちろん世の中に一つだって困難で

ない事業はないのだ。てんでばら〳〵のやうな都會において近代式工場の中では、彼等はすでに一種の中國普通語をつくりだしてゐる。しかもそれは官僚達の國語とはちがつたものだ。彼等は各地の方言のかたよつた性質を消化し外國の文字も受け入れて、政治とか技術とかいふ新しい術語も作り出す。

もとより、上海の勞働者の中には少くとも三種類の普通語が流行してゐることは否めない。だが注意せよ。すでに少くとも三種までには統一されてゐるではないか？　これが更に發達して一つに統一されることが不可能だといふのか？

言語は數學的符號とはちがふ。それは具體的內容をもつてゐるのである。この具體的內容はつねに言語の發展、變革、創造を規定する。見るところ、聞くところ、思ふところ、苦しむところを一にする人々は必ずや共同の立派な單純、明確な、まはりくどくなく、現實的な言語をつくりだすことができるのだ。

（一九三四年九月五日）

〈以下次号〉

注

（1）拙稿「武田泰淳と「文化集團」（その一）」（「上田女子短期大学紀要」第二十二号　一九九九年三月）を参照されたい。